



## 俳句随想 〔三百三〕

汀子

「先ほど私が、芭蕉のこの句の蛙はどこに飛び込んだかと皆様にお聞きしましたね。六十人の中、実に五十八の方が古池に飛び込んだとお答えになりました。」

どうしてそうなったかと言うと、それは切字「や」が一旦上下を切断して読者の連想を刺戟した後に、再びゆるやかに上下を接続するからである。しかしそれは論理的に結びつけるのではない。上下の二つの並列した句の間に何とか辻褃の合った関係を見出そうとする読者の頭の働きによるゆるやかな結びつきなのである。

つまり「や」は文章をわざわざ不完全にして、その文章の不完全さを逆手にとって読者の連想を刺激し、大きなイメージを伝える一つの方法だということができるだろう。

では読者の連想を刺戟する方法として他に何かあるであろうか。それは十七音の中に出来る限りイメージ喚起力の強い言葉を据えることである。季題こそまさにそういう言葉ではないだろうか。

旬日記 汀子

平成十八年九月三日 関西野分会

山と海つなぐ野分の道ありて  
潮の香の加はつて来し野分かな  
岳麓の荘閑ぢめぐる秋の湖  
影共に野分に吹かれゆきにけり  
をさまりし野分の抜けてゆける空

九月三日 下朝句会

露踏んで二十六年忌を修す  
萩揺れて狭庭に風の通り道  
鈴虫の声をなしてとして客間  
忌を修すはかな月日露けしや  
鈴虫の好む部屋などあるらしく

九月四日 ロイヤル俳壇

風見せてくれては隠し葛の花  
山路行く限り香りて葛の花  
馬追と言はれればさうかとも  
吹き渡る野分をさまる夜半のこと  
どんぐりと見えぬ小枝を拾ひ来し  
持ちこられたるは河原の葛の花

九月八日 工業倶楽部

霧深き山路に慣れてカーブ切る  
明日の旅 霧の時も待つならん  
九月九日 日本伝統俳句協会全国俳句大会 金沢  
又萩に又萩に歩のいざなはれ  
訪ひ来しは旅の夜長と一過客  
爽やかや虚子と暁鳥とここに  
九月十二日 大阪倶楽部  
講演の準備夜学に組み込みあり  
露を踏み訪ねたき人のあり

草原の一枚にして虫の闇  
寺門出てそこが畦道蓼の花  
講演の稿をまどめて露けしや  
山越えて露けき空の展けたる

九月二日 綿業倶楽部

これよりの夜長の稿をつゞる灯に  
旅夜長 染しむ時間経ち易く  
灯ともせば旅の夜長のはじまりぬ  
撫子を道々摘みて壺に溢れ  
撫子を摘みて治めし車酔ひ

九月十四日 清交社

講演の準備に追はれたる夜長  
隣り合ふ庭の一劃竹の春  
穴惑とても追はるる露けしや  
又明日に残せし仕事の哀しきや  
池の水澄みて鳥影通りけり  
これよりの地球を救ふ水澄めり

九月十五日 時雨会

台風 来つつかある旅決行す  
爽やかといふはかはなし今日のこと  
爽風の備へおろそかならざりし  
爽やかに仕事片づけ行かべかり  
滞在の生活簡單爽やかに  
爽やかにあれば草稿すすみけり

九月十六日 句会と講演の会

旅は来すよに早稲刈るひとところ  
雁渡りすよみづうみへ幾山河  
今日までといふ秋晴の空仰ぐ  
九月十八日 野分会  
あまつさへ雨も加はり来し野分  
野分去り今日終つてをりにけり  
今の世を生くるすべとは露けしや  
九月十九日 有恒倶楽部  
秋の蚊のひそむ木立を通らねば

七草にもつとも似合ふ忌なりけり  
七草を活けし心は問はずとも  
上京のいつかしづまりぬし夜長  
流星やもつと知りたいたい星のこと

九月十九日 無名会

秋日傘黒は汚れの目立たざる  
たちまち雁の渡りとなりしこと  
雁渡る道をよぎりて空の旅  
さすお洒落ささぬお洒落も秋日傘  
雁降りて来たる水面の一瞬に  
子規忌とて心を天に放ちけり

九月二十日 夏潮句会

何しても今日爽やかと思ひけり  
風吹きて雁渡る空ととのへり  
空に道あり雁高くありにけり  
人知れず渡り来し雁隠沼に  
析の実を拾ひ届けん志  
合飲咲いて季節戻つてしまひけり  
爽やかに歳月込めし上梓かな

九月二十八日 きさらぎ会

雁をこめてひそかに渡り来し雁も  
雁渡る空の漲りはじめけり  
秋晴といゆる期待に富士を置く  
波頭月もろともにもに碑けけり

九月三十日 東海ホトギス同人会

迷はずに着きて爽やかなる旅路  
秋晴も計画通りなりしこと  
快適なドライブにして夫高し  
露乾しく音ノリタゲの森の芝  
雲しく音ノリタゲの森の芝  
九月三十日 東海ホトギス俳句大会前日句会  
午後よりの灯下親しむ会二つ  
これよりは夜長 爽しむ会となる  
露けしや話せば長くなることも

# 廣太郎句帳

廣太郎

九月十四日 土筆会

地虫鳴く地球怒つてゐるやうに  
地虫鳴く東京駅は改装中

わて秋刀魚あんまり好きとちやひまんねん  
鉦叩戸袋といふホールかな  
九月二十七日 目黒学園句会

地虫鳴く土の減りたる都心かな  
梯の甍りたる秋日傘  
稲を守る水戸黄門でありにけり

月出でて東京駅の膨らみぬ  
蓑虫に風は力を抜いてをり  
夜食とる結局ワイン抜いてをり  
一服の紫煙夜食の湯気に溶け  
蓑虫の糸の繋げる宇宙かな  
自転てふ月に主張のありにけり  
九月二十九日 六甲会

九月十六日 子規忌ホトギス社句会

七草に寄す子規没後百四年

九月十七日 鬼城忌全国俳句大会

二十回縁を露の袖に寄せ

九月十九日 草木瓜会

吾亦紅榛名の風に逆らはず

花野へと浄土へと人行きたがる

木道は二人の世界吾亦紅

夜長の灯使ひ切つたる百句かな

吾亦紅故郷の人皆親し

大花野榛名風に育まれ

東京に子規忌芦屋に順三忌

長き夜のオペラ一幕では足らず

糸瓜忌や根岸で甘いもん食うて

一本の赤に始まる大花野

六甲会ダブルヘッダー秋高し

九月二十日 登高会

九月三十日 東海ホトギス同人会

一枚の空蜻蛉に破られし

今日阪神どないなるやろ獺祭忌

合資会社ホトトギス社の夜長の灯

吾亦紅君はその心を見たか

地下よりの水天よりの水澄めり

伊吹嶺に霧の存問ありにけり

夜長の灯滑り新幹線発車

三日月に向けて今岡決勝打

九月二十六日 若水会

鱗雲空は力を抜きはじめ

糸のころや最近の猫おとなしい

爽やかに大煙突といふ主張

ビル風に叩き損ねて鉦叩

アンティークドール秋灯吸ひ込めり

秋刀魚焼くここに殿様来たといふ

冷やかにボンチャイナの艶めけり

娘の帰宅遅いおそいと鉦叩

秋刀魚焼く若屋マダムでありにけり

平成十八年九月一日 夢二忌全国俳句大会

点在といふ夕菅の主張かな

本当は目立ちたいのよ松虫草

傘の花咲いて花野の一部分

九月六日 一水会

秋蝶を遊ばせてゐる空の黙

露の世の視界広がる移転かな

九月七日 蕉心会

夜仕事を終へて移転の荷を解く

鉦叩都心の夜を彩れり

大川の秋風いつも裏切らず

移転の荷積まれいよいよ灯下親し

大川の色を変へゆくほどの秋

秋風と対話してゐるビルの窓

秋風にスクリーン音の咄して

九月九日 伝統俳句協会全国大会

あの山もその山も白山も霧

九月十一日 朝日カルチャー若草句会

虫を聞く耳となりゆく帰宅かな

虫の声風彩つてをりにけり

屋の虫忘れられたる句碑一基

瓢箪を腰に千両役者かな

# 雑詠

## 廣太郎 選

春潮に地震の昂り残る能登 金沢 藤浦昭代  
 避難所に又も余震のある遅日 同  
 地震町に一縷の活気燕来る 同  
 六甲の霞に乗つてゐる書齋 神戸 山田弘子  
 鎌倉のひとりの家路星おぼる 同  
 夜桜の底に結びし夢のいろ 同  
 馴れといふ心いましめ虚子祀る 八王子 原三猿子  
 生涯に賜ひし一語椿寿の忌 同  
 対岸と云ふ距離置きし花見かな 同  
 喘ぎつつ奥千本へ花を追ふ 長岡 安原葉  
 振り向けば落花仰げばまた落花 同  
 星ふえてきしみよし野の花の闇 同  
 卯浪見ること遠州灘に亘ち 熱海 嶋田一步  
 さう言はれさう見る卯浪立ちて来る 同  
 途中富士見ることできて卯浪見る 同  
 花嫁に人群れて歩し花の宮 同 嶋田摩耶子  
 住みつづけゐる吾に燕来たりけり 同  
 飛び交へる燕返しの燕たち 同

花の谷湧くが如くに落花かな 樫原 稲岡 長  
 花屑を浮かべし水の流離かな 同  
 刻々と連翹の黄を明かす朝 同  
 観世音寺風あるなしに樟落葉 福岡 松尾緑富  
 参道に人なきしじま樟落葉 同  
 宰府路を歩き疲るる薄暑かな 同  
 蒲公英や一面といふばらばらに 香川 湯川 雅  
 若楓濃きは淡きの影絵なる 同  
 溜めきれぬ光は撥ねて里若葉 同  
 お祈りをして遠足のお弁当 東京 山田閨子  
 春の月尖りしままに潤みけり 同  
 み吉野の午前八時の落花かな 同  
 葉桜やまた雲かかる日のおもて 高松 もりおかともこ  
 闇に襲つくりて蛙鳴きにけり 同  
 夜の蛙闇広げたり縮めたり 同  
 わが魂のいま昇天のごと落花 福山 竹下陶子  
 神天降り給へる落花滝となる 同  
 柚子風呂に花鳥諷詠ありにけり 同  
 春愁を笑ひとばして杖に佇つ 同  
 栄転の人見送りぬ初つばめ たつの 浅井青陽子  
 花冷に気をゆるすまじ句座につく 同  
 寒明けてごぞり咲くものなにかや 同  
 紅梅の紅を深めし黝さかな 神戸 保田 晃  
 初雷や流れゆく雲むらさきに 同

# 雑詠句評（八月号より）

一步・弘子・昭代  
雅・しげ人・くに彦

純也・暮潮・比奈夫  
仁義・廣太郎

## 忽然と虚子忌未明に逝かれけり 長岡 安原 葉

人の死というものが、それが近親者であろうが、ごく親しい人であろうが死までの経過を熟知していようが、死に対する気持は常に忽然と来るものである。まして虚子忌の四月八日に、またその未明に亡くなったことは一層忽然としてという思いがしたのである。未明という語を敢えて使ったのも虚子先生の夕暮の死を知ったのことに拝察する。僧侶としての作者、同門僧侶であり兄であった人の死、それが虚子忌であったことに大きな因縁を感じて出来た句であろう。（一步）

平成十九年四月八日、作者の敬愛する兄上堀前小木菟様が幽明界を異にされた。訃報は作者御本人から虚子忌会場の寿福寺でお

聞きする事となったが、図らずもその虚子忌が同じ忌日となってしまわれたのである。淡々と述べられた中の悲しみは如何ばかりであろうか。（廣太郎）

## 雪国の面目たちし春の雪 上越 堀前小木菟

全国でも屈指の豪雪地帯として知られる新潟県上越市だが、この冬は殆ど雪を見ないまま過ぎた様子。いつもなら雪と戦う冬の生活なのに、些か肩すかしの感だった。ところが立春を過ぎてから急な寒波が到来し、どか雪がやってきたのである。雪国に雪のない冬というのは何となく落着かないのであろう。これで漸く雪国の面目がたつた、という安堵感を抱くというのも土地の自然と共にある人なればこそその感慨であろう。

去る四月八日、虚子忌の法要の席で、突如小木菟氏ご逝去の報がもたらされ、一同愕然とした。僧籍にあり、虚子の教えをひたすら遵守しながら生涯を全うされた作者は図らずも大虚子と忌日と同じゅうする俳諧仏となられたのである。合掌。（弘子）

堀前小木菟様の、恐らく最後のホトトギス雑詠御投句ではないだろうか。長年雪国で生活され一生を送られた方であるが、昨今の異常気象でそんな地方にも雪が少ないと聞く。雪が降ったら降ったで、厳しい生活を余儀なくされるが、その雪を愛でながら旅立たれたのであろうか。（廣太郎）

天地有情

一期とは言はず一会の花に会ふ  
 花に一会花に一会と老いけらし  
 僧遷化されし山内竹の秋  
 門前に中陰とあり竹の秋  
 偲ぶとは花仰ぐこと仰ぎけり  
 花は葉にあの人もこの人も故人  
 籠る身に旅の誘ひのあたたかし  
 遣りたる俳磚とあり永き日を  
 春昼や遇ひたき人は天に在り  
 命みなつながつてゐる臚かな  
 万緑の中に小さく吾はあり  
 黒南風の暗めし野山ひかりけり  
 ワイナリーてふ一塊の花の雲  
 雛納して洋室となりにけり  
 菖蒲湯に脛のとがりし農夫かな  
 菖蒲湯に離農を秘めし老農夫  
 虚子百句さらに読み来て忌に侍る  
 室の津の丘の社に春惜む

神戸 後藤比奈夫  
 同 長岡 安原 葉  
 同 熊本 岩岡中正  
 同 姫路 桑田永子  
 同 豊中 瀧 青佳  
 同 榎原 稲岡 長  
 同 東京 稲畑廣太郎  
 同 大田 波多野弘秋  
 同 浅井青陽子  
 同 たつの

風雪に耐へし幹あり冬牡丹  
 天帝に捧げ果てたる冬牡丹  
 羽衣のごと花冷をまとひけり  
 はたと花散るを忘れし虚空かな  
 花の山閑かに幕を引く日かな  
 下千本には花人のもう来ない  
 還らざる時間の中へ散るさくら  
 一片の落花に山の朝うごく  
 こでまりに触れば風の白くなり  
 鉤引きてたわんで揺れて袋掛  
 遠足の子がまた一人こぼれさう  
 走りぬる風船だけが見えてゐる  
 更衣胸に大事を秘めながら  
 根切虫に生れ合せしだけのこと  
 関と言ふ字吉野の春のため  
 食べてゐる岩魚の男前かとも  
 大阪にひとり修する虚子忌かな  
 熱の子の目開く遠き祭笛

福山 竹下陶子  
 同 神戸 長山あや  
 同 芦屋 黒川悦子  
 同 神戸 山田弘子  
 同 新見 黒杭良雄  
 同 東京 今井千鶴子  
 同 神戸 三村純也  
 同 後藤立夫  
 同 箕面 井上浩一郎  
 同

虚子選

# 天地有情句評

汀子

遣りたる俳磚とあり永き日を 姫路 桑田永子

俳磚に遺された句を見をから青虎様を偲ぶ永子未亡人の日永。

春昼や遇ひたき人は天に在り 豊中 瀧 青佳

遇いたい親しかった故人は天に召されてしまった淋しさ。春昼

を過ごす時の回想。

万緑の中に小さく吾はあり 樺原 稲岡 長

様々な緑の木々に包まれて、何と小さき我が身であるか。万緑

が描けた。

雛納して洋室となりにけり 東京 稲畑廣太郎

今の若者の生活が垣間見られる雛納。

菖蒲湯に離農を秘めし老農夫 大田 波多野弘秋

菖蒲を浮かべたお風呂に浸りながら将来を考える作者の決意。

一期とは言はず一会の花に会ふ 神戸 後藤比奈夫

この花が生涯の見納めになるとは言わない。今年もこの花との

出会いを持てたと言いたい。

僧遷化されし山内竹の秋 長岡 安原 葉

崇高なご生涯を全うされた僧堀前小木菟様は作者の兄上。山内

の竹の秋が悲しみを語る。

偲ぶとは花仰ぐこと仰ぎけり 熊本 岩岡中正

桜が咲くと思ひ出す故人のこと。偲ぶ心をもつて花を仰ぐ。